

###

私はその日、小さな地震で目を覚めました。

その地震はかすかなゴウーツと言う音と共に始まった。しばらくの間、私はうつらうつらしながら揺れる電灯の紐を見ていたが、上体だけ起こして目覚まし時計を引き寄せると、時計は5時25分を指していた。

震度3ぐらいだろうか、その地震は少しの間揺れ続けると、何もなかったように収まった。そして私はふとんを引き寄せる、また眠りの中に落ちていった。



私はいつも通り、時ごろ起きて、朝食の支度を始めた。その時にはもう未明の地震のことなど忘れていて、私は朝食のパンを焼きたがらトースターの前で眠い目をこすっていた。

そして食卓に座り、テレビをつける。朝一番のニュースを確認するつもりだったが、リモコンのボタンを押して起動させても、テレビには何も映らない。

「あれ、あれ……」

その時ようやく地震のことを思い出した。もしかしたら地震の揺れでテレビかアンテナ

ナかが壊れたのかもしれない。でも、そんな大きな揺れじゃなかったと思うんだが……。私は部屋の隅のテレビの後ろに回ってコードの接続を確かめた。別にどこも外れてないし、壊れてもいない。

（しようがないな。）

明日にでも管理組合に連絡してアンテナを点検してもらおう。私は目玉焼きの黄身を喉に流し込むと、パソコンの前に向かった。別にニュースなら、インターネットで確認してもいい。

パソコンはちゃんと動いていた。でもWebブラウザを起動しても、つながらない。

「サーバーが見つかりません」と表示されるだけだ。どこのサイトもそう。どうもイ

ンターネット回線まで壊れてしまつたらしい。私はあきらめて部屋のハンガーに掛かつていたスーツをとつた。もう会社に出社する時間だ。

私が住んでいるマンションを出ると、外は鮮やかな快晴の空だった。太陽はさんさんと輝き、まるでオゾン層がなくなつたかのようにまっすぐ照りつけてくる。しかしその時私は不思議な感覚に襲われた。なんだ？何かがおかしい。そうだ……音がしない……。

そしてもう一度その空を見上げたとき、私の目に初めてみる二機の飛行機が入ってきた。灰色のすんぐりした胴体に、幅広の大きな翼、後ろの方には両側にタンクのようなものがついている。翼には、国旗こそな

かったものの「UNITED STATE  
S」と大きく書かれていた。その二機の飛行機は音もなく、旋回しながら空の彼方へ飛んでいく。

そしてその飛行機の飛んでいく先を見送ったとき、私の目に見たこともない光景が入ってきた。

それは、空の向こうの宙だった。空の遠くに黒いもやのようなものがかかっている。そのもやは黒々と、そしてぽっかりした穴を空に開けていた。私はそれを見たとき、なぜか身震いした。なんだ、あれは……。まるであそこだけ空間が無くなったかのようだ……。私の本能が、それを「危険」と知らせていた。

マンションの前を歩いていったが、人っ子一人いない。私はあの飛行機も、黒いもやも、人がいないことも気になつたが、会社に行かないわけにはいかないので、駅までの道のりを急いだ。

駅に近づくと、ようやく人の群れが現れてくる。そして、駅についてからようやく私は何が起こつたのかを知つた。私がついた頃には、すでに駅は慌ただしい、でも何かいつもと違うぴりぴりとした雰囲気にかまれている。改札の前には人だかりができ、私と同じようなスーツ姿の男性が背を伸ばして奥を見遣り、二人のおばさんが暗い顔で話し合い、制服姿の女子高生のグループがみな言葉もなく泣いている。そしてその横を駅員の人が駆けていった。

私は人だかりを強引に押し分け、改札までたどり着いた。そしてそこで私はそこに「高田さん」がいるのを見つけた。私が前、ICカードを使って通ろうとしたときにトラブルを起こした改札機の点検をしてくれた人で、そのことがきっかけで見知りになった人だ。私は仲間の駅員に向かって叫んでいた高田さんに声を掛けた。

「高田さん、高田さん！ 一体これはなんの騒ぎですか」

「あ、小島さん……」

高田さんは落ち着かないように視線を飛ばしながら、ようやく私を見ると言った。

「都心に……都心に、原爆が落ちた」

「はあ!？」

駅の騒ぎの原因はそれだった。都心から来

るはずの電車が来ないのだ。中央センターと連絡を取ろうとも、電話も何もつながらない。かろうじてつながった都心近郊の駅から、とんでもないことになっている、と連絡があつた。そう、都心に核が落ちたようだ、と。

私は駅の裏に回つて、駅員用の駐車場に止めてあつた高田さんの車を借りることにした。普通なら個人情報も入っている端末が搭載された車を人に貸すことなどないのだが、高田さんは動揺していて気が回らないのか、二つ返事で了承してくれた。

車を出すとき、鍵を回しに来てくれた高田さんが心配そうに言った。

「ほんとは行くんですか。」

「ああ、」

私の返事に高田さんは何も言えずに宙を見た。私は言った。

「俺は、知りたい。そして伝えなければいけない、何が起きたのかを。俺は――、新聞記者なんだから。」

そして、高田さんはもう一度私を見ると、言った。

「小島さん、ちゃんと、帰ってきてくださ  
いよ――」

ああ、と私は返事をする、キーを回して車のエンジンを掛けた。そして心配そうな高田さんを残して、私は車を発進させた。

車のカーナビをつけてみると、GPSは動作したが、地図情報は利用できなかつた。こんなときに役に立つとはな——。わたしは駆け出しの頃「アナログを大事にしろ」と上司に言われて、その時からいつも持ち歩いている地図帳をとりだした。紙の地図を読むのは何年ぶりだろうか。私はルートを確認した。よし、なんとかいけそうだ。車を走らせて一路都心へ向かったが、町並みは普通だ。ただ、太陽だけが照りつける。その時私は気づいた。空に上がっているあのもやは、煙だ。原爆で焼かれた街の煙が、空に上がってあの黒い、もやになっているのだ。

そしてそのもやを上に見ながらしばらく車

を走らせると、少しずつ焼け出された街が見えてきた。

まず、ビルの屋上にあつたはずの看板が道路上に落ちていゝる。窓ガラスが割れていゝる。時々そのガラスで切つたのか、血を流して歩いている人たちがところどころにいた――。近づけば近づくほど、街には瓦礫の山が散乱してきていた。私は車を走らせだが、何を踏んだのかタイヤの一つがパンクしていた。そして瓦礫で通れないところを迂回するため何度も遠回りした。時間ばかりがかかり、私は焦つた。

そして、私は途中で車を止めなければいけなかつた。――あとで思うとこれは幸運だつたかもしれない――どこも建物が倒壊して、つながっている道路がみな封鎖

されていたからだ。私が車を止めてドアを  
開けて出たときには、街はもう夕焼けに包  
まれていた。そしてドアを閉じて歩き出そ  
うとした途端に、私の足に何か引つか  
かった。

——それは、人だった。人が倒れている。  
その人の服は黒く燃え尽きて、そして、な  
んの痕だろう、一本のきれいな筋だけつけ  
て、残りの肌は全て黒く焼けつけられてい  
た。——その人は動かなかった。私は思わ  
ず口を押さええてあとずさった。

わたしは車のドアに後ろ手をつくくと、息を  
吐いてなんとか気持ちいを落ち着けさせた。  
そして積み上がっているがれきの端まで歩  
いてその隙間から奥を眺めると、黒々と焼  
かれて廃墟と化した町並みが、遠くに見え

た。——ちぎれ雲から落ちた黒い雨が街を濡らしている。道路の反対側で一組のカツプルが、目に涙を浮かべて手を繋ぎながら、ただ、遠くの夕焼けを、呆然と眺めていた。



東京は、75年前の広島・長崎と化した。都心は焦土になり、都民の人口は半分に減り、都市機能は完全にストップした。国会も、首相官邸も、霞ヶ関も、その中の政治家や官僚たちと一緒に全部跡形もなく消え去った。首都を失って完全に国家機能が麻痺した日本だったが、大阪・京都・名古屋・福岡・仙台・札幌などの主要地方都市が協力して、その後の日本をなんとか維持していった。

核を打ったのは北朝鮮だった。海自のイー  
ジス艦のレーダーが、北朝鮮から発射され  
る核ミサイルを捉えていた。迎撃ミサイル  
は三回、発射されたが、どれも命中するこ  
とはなかった。日本と同盟を組むアメリカ  
のバイデン大統領は、これを持って北朝鮮  
にアメリカの艦隊の全てを差し向け、総攻  
撃を命令。途中から日本の自衛隊と国連決  
議によって結成された国連軍もこれに加わ  
り、北朝鮮の金正男政権は崩壊した。

結局北朝鮮が核を打った理由はよくわかっ  
ていない。アメリカが水面下で行っていた  
秘密工作に気がついて発射したとか、核  
ミサイル発射装置が誤作動したとか言われ  
ているが、どれも確かな情報ではない。た  
だひとつ確かなことは、その一発を持って

世界は大きく揺らいだと言うことだ。

東京の都心は今も放射能に汚染されたままだ。最近の調査で放射能の濃度が下がってきたことがわかったが、それでもまだ人が住める状態ではない。

私は今でもあの道路にたたずむ二人組のカップルを思い出す。あるとき、泣き崩れる彼女の肩を抱えて、彼はこう言った。

「君がいて、僕がいる。僕らは生きている。だから、泣かないで」と。

■ (2009.2.26)

###

テーマソング… 『ズラチナルーカ』 スキマ

スイッチ (BMG JAPAN)